

# あの頃、思い出の現場

仙台塩釜港仙台港区航路陸上掘削工事

りんかい日産建設株式会社 執行役員土木事業部長 塚本 喜之氏

## 大きな声で、あいさつを

昨年3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方の太平洋沿岸域に甚大に被害をもたらした。1977（昭和52）年にりんかい建設（現りんかい日産建設）に入社し、その後30年近く仙台支店に勤務していたため、被災した港湾施設やインフラ整備を見るたびに、胸が痛くなるという。

「入社後すぐに仙台支店に配属され、途中3年間の本

社勤務を除けば2007（平成19）年までの27年間を東北で過ごしました。東北各地で港湾や陸上の工事を担当させてもらい、被災地にはいろんな思い出があります。それだけに変わり果てた被災地を見ると、涙が出そうになります」。

仙台勤務のうち、入社後の16年間は現場を回った。宮城県内を中心に港湾工事だけでなく、県・市発注

の土地造成や下水道、法面など陸上工事にも数多く携わった。なかでも印象に残っているのが、仙台塩釜港仙台区での工事だ。

「仙台に赴任した年の秋に担当したのが、仙台港区の航路陸上掘削工事でした。所長を含め4人の職員がいたのですが、入社したばかりで何も分かりませんので、上司や先輩に指示されるまま無我夢中で仕事をしていました」。

工事は、掘り割り式の仙台港区の最奥部を掘削（水深7.5m）するもの。陸上からの掘削のため、現場にはスクレーパーやブルドーザーが往来。港湾工事と言うよりも、陸上工事に近いものだった。

「弁当運びや各種の作業用具の買い出しなど、まるで小間使いのようでした。作業面では毎朝、協力業者の方々が現場に来る前に、掘

削した法面の測量などを行い、その日の作業に備えていたのが記憶に残っています」。

当時は、朝から晩まで「とにかく働いていた」という感じだった。今考えると、若い時のこうした作業で、現場を円滑に運営するための「段取りの大切さ」が、自然に身についたのかもしれない。

仙台港区では1990（平成2）年にも工事を担当した。この時は、現場所長としてケーソンヤード床掘及び海上打継場築造工事を実施した。わずか3カ月弱の工事だったが、この間に現場から不発弾が発見され、大騒ぎになったという。

「不発弾は1mぐらいの大きさで、ブルドーザーが不発弾の上に載ったため、側面がへこんでいました。すぐに発注者に連絡し、作業員を避難させました」。

その後、自衛隊が不発弾を海上で爆破処理した。「当時の写真はあったのですが、津波で当社の倉庫が流されてしまい保管してあった書類が全て無くなってしまいました」。

現場担当から離れ、すでに20年近くになるが、現場に出る時はいつも心がけていたことがある。「とにかく大きな声であいさつすることです。現場はチームプレーですから、和が大切。どうせ仕事をするのなら楽しくやる。それには、大きな声であいさつすることから始まるのがいい」。

現場を円滑に動かす秘訣かもしれない。



塚本 喜之 氏

1977年にりんかい建設（現りんかい日産建設）入社。同年仙台支店に配属され、各現場に勤務。93年から同支店勤務、98年に本社土木本部勤務、2001年に仙台支店土木部長、03年にりんかい日産建設仙台支店土木部長、07年12月から現職。57歳。埼玉県出身。



東日本大震災前の仙台塩釜港仙台港区。①が航路陸上掘削工事の場所、②がケーソンヤード床掘及び海上打継場築造工事の場所。  
提供：塩釜港湾・空港整備事務所